

07 誰もが暮らしやすい社会へ（HIV感染者）

皆さん、いかがお過ごしですか。福岡市がお送りする「このころのオルゴール」の時間です。今日は私、山田としあきがお届けします。タイトルは「誰もが暮らしやすい社会へ」です。

HIVは、エイズの原因となるウイルスです。免疫が正常に働かなくなるため、かつては「死の病」と恐れられていましたが、医療の進歩により薬を飲み続けられればエイズ発症を抑えることができるようになりました。

中央区の九州医療センターでは、九州地方のHIV診療拠点として、年間およそ700人のHIV感染者の診療を行っています。20代から80代までと幅広い年代の感染者が、治療を受けながら日常生活を送っています。

現在、HIV感染者の高齢化が進み、介護施設や医療機関が入所、診療を拒否する問題が起きています。そこで、エイズ／HIV総合治療センター部長の南留美さんは、HIVへの理解を促すため、医療や福祉関係者、当事者などによる「福岡県HIV陽性者地域支援ネットワーク」を設立しました。ここでHIV陽性者という言葉を使っているのは、HIV感染者という呼び方では、感染のリスクが抑えられているの

25

に、感染源であるような印象を与えてしまうからです。
みなみに、ネットワークの活動について聞きました。

30

「このネットワークでは、異なる立場の人が集まり、どうすれば受け入れが進むのか話し合っています。そして研修やセミナーなどを通して、HIV陽性者が安心して生活できるように働きかけていこうと考えています。」

35

みなみに南さんのもとは偏見や差別を恐れ、「薬を飲んでいることを誰にも知られたくない」「薬の名前を見られたら、HIVに感染していることが分かってしまうのではないか」など、周囲に知られる不安を訴える相談が寄せられています。

40

みなみに南さんは、「HIVは高血圧などと同じく、適切な治療を受けながら一生付き合っていく病気になりました。会社で高血圧の薬を飲んでも誰も気にしないように、HIVの薬を飲んでいることを気軽に言える世の中になってほしい」と話します。

45

HIVの治療を受けて症状が抑えられていても、周囲の目に不安を感じ、悩み苦しんでいる人がたくさんいます。私たちが正しい知識を持ち、理解を広げていくことで、誰もがもっと暮らしやすい社会になっていくのではないのでしょうか。

（本文939字）